



戸田氏鉄 公

文教協会50年を振り返る① 文教の町「大垣」

文教協会事務局



平成24年4月8日、満開の桜が咲き誇る中、大垣市船町に「奥の細道むすびの地記念館」がオープンしました。オープンにあわせ、70年ぶりに曳き揃えられた全13輦の山車、かつての川湊のにぎわいが感じられる船下りなど、改めて城下町大垣の歴史にも触れることができました。

「奥の細道むすびの地記念館」では、松尾芭蕉と大垣の文人たちとの交流の足跡を間近に感じることができますが、「先賢館」では、文教の町「大垣」の謂われを学ぶこともできます。ぜひ多くの市民の皆様や子どもたちが、ふるさと「大垣」を誇りに思う気持ちが高まるよう期待しています。

さて事務局にある歴代の「文教協会報」も、学識者から文教についての多くの原稿が寄せられています。今回は、平成5年5月号(No.405号)から紹介します。

大垣の文教を高めた人々

岐阜県 博物館

1 はじめに

岐阜県博物館では平成4年度秋季特別展「近世に輝く濃飛の群像」を開催しました。江戸時代に焦点をあてたのは、この時代が日本の社会や文化を発展・成熟させた期間であるといわれ、県下各地の地域的特性を形成したと考えられるからです。地域社会の発展や教育・文化の向上に大きな役割を果たした人物を通して、地域の歴史や文化を見つめ直し、郷土への愛着を深める一助になることを願って企画したものです。

この特別展を実施するにあたり、県下各地ですばらしい業績を残した人物に関する資料調査を行いました。その中で、大垣からは県下の他地域と比べて実に多くの優れた人物が輩出していることを、改めて認識しました。大垣は多くの分野にわたって、質の高い文化を生み出した、まさに「文教のまち」であったのです。

ここでは、文教を高めた人々の一端を紹介します。大垣の優れた人物の業績を通して、大垣の歴史的文化的風土や特性をみつめる機会になればと想います。

2 文教を重視した歴代藩主戸田氏

大垣の地に文教が盛んになる端緒を開いたのは、寛永12年(1635年)に大垣10万石城主となった戸田氏鉄です。氏鉄は幼少の頃から読書に親しみ、膳所城主時代には大儒学者藤原惺窩に四書五経(儒教の経典)や資治通鑑綱目(中国の歴史書)を学びました。また林羅山らを招いて儒学を講義させるほどでした。こうして学問を修めた氏鉄は「八道集」や「四角文集」などを著し、君臣のあり方や学問・修身・政治などに関する教訓を示しました。

玉琢かざれば器を成さず。人学ばざれば道を知らず。
これ故に古の王は国を建て民に君するに教学を先とす。
(「四角文集」の一節)

このように氏鉄は、率先して学問に取り組むとともに、治政の要として学問を重視しました。

氏鉄の後に藩主となった氏信・氏西・氏定らも儒学の講義を受け、学問を修めようとなりました。5代氏長は、荻生徂徠の高弟守屋蛾眉や福田太室を大垣へ招いて、学問を奨励しました。そのため守屋東陽・福田少室・大石桂林などの学者が育ち、学問が次第に大垣に根づいていきました。氏英は優秀な藩主を江戸や他藩へ遊学させ、氏教は心学を通して領民の教化に力を注ぎました。



戸田氏庸 画像

8代氏庸は学問所（藩校）を設置し、人材育成に乗り出しました。幕末期に藩主となった氏正・氏彬・氏共らは、藩校の規模拡大をはかるとともに、時代の激変に応じた藩校の改革を行い、洋学・兵学・砲術などを移入しました。大垣藩校は、学問所から致道館・敬教堂・学館へと改称されましたが、施設や内容の充実がはかられ、幾多の有能な人材が育成されました。

このように、歴代藩主戸田氏の文教を重視する姿勢や治政は、学問や文化を尊重する気風を大垣の地に培い、文教のまち大垣の基盤を形成していったのです。

3 大垣俳壇の先駆者谷木因

江戸時代の文化人は、社交的教養として俳諧を多くの人々がたしなみました。大垣に俳諧文化を隆盛させるのに、大きな役割を果たしたのが谷木因です。船町の船問屋主人であった木因は、京都の北村季吟の門に入り、師から俳諧の秘伝を授けられるほどでした。木因の俳諧に対する見識の高さは、芭蕉と木因の往復書翰「鶯の巻」から窺えます。木因宛の書翰で、新たな俳諧を模索していた芭蕉が、和歌の体にした鶯の附句をする工夫を試み、その良し悪しを木因に問いました。木因は芭蕉の工夫にこめられた意図を鋭敏に察知し、機知に富んだ返答をしました。木因は芭蕉が模索している新たな俳諧のよき理解者だったのです。これが契機となって、芭蕉と木因はより一層交流を深め、4度にわたって芭蕉の来垣となりました。木因は中川濁子・宮崎荊口・近藤如行など多くの大垣俳人を芭蕉と結びつけるとともに、熱田・名古屋などの俳人を紹介して、焦風俳諧の隆盛に尽力しました。

また木因は焦風だけでなく、俳諧の大きな流派である「貞門」や「談林」にも通じ、全国の著名な俳人とも交流した文化人で、自らも多くの俳諧書を著しました。さらに木因は東本願寺法主・高須城主・加納城主などから招かれ、古典や俳諧を教えました。

このように見識が高く、幅広い俳諧活動をした木因によって、西濃一帯に多くの俳人が育てられ、大垣を中心にして俳諧文化の華が開いたのでした。

4 美濃の漢詩界や蘭学をリードした人々

漢詩の創作はより質の高い文化的素養として、武士階級の人々や地域の指導者層に必要とされていました。そのため師について学んだり、同士が結社をつくって、漢詩を発表したり批評したりしながら研鑽に努めました。



白鷗社集会図

美濃国で特によく知られた代表的な結社が白鷗社は文化 10 年（1813 年）に美濃へ来遊した頼山陽に強い影響を受けて結成されました。山陽はこの時すでに「日

本外史」の初稿を脱し、自らの学問を世に問おうと意気込んでいました。美濃の文人たちは、山陽の志の大きさと学問への造詣の深さに大きな感銘をうけ、江馬細香・後藤松陰・金森匏庵・牧百溪など多くの人が門人となりました。梁川星巖、柴山老山・村瀬藤城・江馬細香が中心となり、月1回大垣伝馬町の実相寺に集まり、大いに議論して研鑽に努めました。白鷗社に集まった人々は、美濃漢詩界の中心的な人々で、美濃の文化をリードしていきました。

特に白鷗社の主宰であった星巖は、後に江戸へ出て詩人として活躍する中で、次第に尊皇攘夷思想のリーダーとなって活躍しました。また細香は山陽によって諸名家と交わり、文名を一層高めました。

このように美濃の漢詩界をリードした地が大垣であったように、蘭学の中心地も大垣でした。美濃国で最初に蘭学を修め、関西ではじめて西洋医法を用いたのが、江馬蘭齋です。大垣藩医であった蘭齋は、漢方医法の限界を感じ、オランダ医学を学ぶために江戸に赴いたのは46歳の時でした。一心不乱に学んだ蘭齋は、わずか3年でオランダ医学を身につけ、大垣で蘭学塾を開きました。吉川宗元・小林玄良など多くの名医や学者を育てた蘭齋は、美濃蘭学の祖といわれました。

大垣の町医者であった飯沼欲齋も漢方医から蘭方医に転じ、名医として広く知られました。欲齋は美濃で最初の人体解剖をしたり、種痘に早くから取り組むなどし、医学の発展に尽くしました。また家督を50歳で譲った欲齋は、日本各地の植物草類1215種、木類600余種をリンネの分類法によって分け、正確な図をつけた「草木図説」を著しました。さらに本草家・化学者としても輝かしい業績を残しました。

このように大垣の地からは、多くの分野ですばらしい人々が輩出し、文化の華が大きく開いたのです。



敬教堂 跡

5 おわりに

大垣からは文教を高めた数多くの人々が輩出したのは、次のようなことが考えられます。大垣は美濃国最大の藩で、西濃の物資が集中しやすいところにあり、経済力に恵まれていたこと。交通の要衝にあり、京都や江戸との交流がしやすく、情報や時流を察知しやすかったこと。藩主戸田氏による文教重視の治政がとられたこと。等々いくつもの要因があげられます。

しかし、文教の興隆は何にもまして、より高まりたい、新たなことに取り組んで視野を広げたいといった一人一人の意欲によるところが大だともいえます。蘭齋や欲齋のように年令をこえた探求心や進取の気持ちを大切にしたいものです。

(県博物館 学芸部 課長補佐 今津利治氏)